

# ユングの知っていた神

——自伝に探る

宮 下 聡 子

## はじめに

神をめぐるカール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) の言説は、しばしば物議を醸してきた。とりわけ『ヨブへの答え』(1952年) でユングが主として聖書に基づいて神の悪の面や神の無意識性を指摘したことは大きな波紋を呼んだ<sup>1</sup>。またユングは、1959年10月22日、BBCのテレビ番組『フェイス・トゥ・フェイス』でジョン・フリーマンのインタビューを受け、「あなたは今神を信じておられますか」と問われて、「今ですか」と問い返してから、少し間をおいて、「お答えするのは難しいです。私は知っていますのです。私は信じる必要がありません。私は知っているのです」と答えた<sup>2</sup>が、これも大きな反響を呼んだ。このインタビューの抄録が同年10月29日付の『リスナー』誌に掲載される<sup>3</sup>や、ユングの当該発言、とりわけ神を「知っている」という発言をめぐる、ユングのもとにはたくさんの手紙が寄せられ、ユングは1960年1月21日付の『リスナー』誌でそれらに一括で応答した<sup>4</sup>。応答の要をなすのは、神を知っているとはどういうことなのかについての説明であるが、その説明に先立って、ユングは次のように弁明している。「[神の知]についての私の見解は非慣習的な考え方であり、あなたはキリスト教徒ではないと言われたとしてもよく理解できます。しかし私は自分をキリスト教徒であると考えています。というのも私は全面的にキリスト教の概念をよりどころにしているからです」。次いで、当の発言について、その意味するところをユングは次のように説いている。「私がある特定の神 (ゼウス、ヤハウェ、アラール、三位一体の神等) を知っているという意味ではありません。むしろ、私がそれ自体は知られていない要因と明らかに対面しているということを知っているという意味です。その要因を万人の合意 *consensu omnium* (「いつでも、どこでも、誰にでも信じられているところ *quod semper, quod ubique, quod ab omnibus creditur*」) において私は「神」と呼んでいるのです」。このように、ユングはキリスト教徒を自認しながら、自らが知っている神は特定の宗教の神ではないと弁じる。ユングにはキリスト教徒としてのアイデンティティとキリスト教にとらわれない神理解が同居しており、そこからして既に、ユングの知っていた神とはキリスト教の異端の神であることが予想されるのである。さて、肝心の自らが知っている神がどのような神なのかということについては、ユングは次のように表現するにとどめている。「反則ではありますが、私のイメージの実体化をあえてしてみるなら、善悪を超えた神は私自身の中にも、また他のどこにでも住している、すなわち神はその中心がいたるところにあり、その周がどこにもない円である *Deus est circulus cuius centrum est ubique, cuius circumferentia vero nusquam* と私は言うでしょう」。多分に異端的な匂いがするが、この抑制のきいた表現は未だ抽象的であり、ユングの知っていた神とは具体的にどのような神であったのか、知りたくなるのである。本稿では、それを探るべく、ユングの自伝『C・G・ユングの思い出、夢、思想』(1961年)<sup>5</sup>に臨む。

冒頭で触れたように、神をめぐるユングの言説はしばしば物議を醸し、とりわけ『ヨブへの答え』で示さ

れたユングの神理解が投げかけた波紋は大きかったのであるが、私はユングの特異な神理解の根源にはユングの「神の知」があると見ています。ユングが知っていた神とはどのような神であるのかを明らかにすることが、まずなされなければならないことであると考えるのである。そのことによっておのずと、ユングがどうして聖書の神に悪の面や無意識性を見てとり得たのかということも理解できるようになるはずである。

## 1 自伝について

本章では、ユングが知っていた神を探るためによりどころとする自伝について述べる。

### 1.1 自伝をよりどころとすることについて

まず、自伝をよりどころとする理由を説明しよう。自伝の編者アニエラ・ヤッフェは自らの筆になる序(1-9)<sup>6</sup>の中で、「本書はユングの宗教的告白を収めている」(5)と明言しており、また次のようにも述べている。

ユングは彼の回想録で初めて且つ唯一、神Gottについて、また彼の個人的な神の経験について語る。彼は自らの若者らしい教会への反抗について書いていた日々の中、ある時こう言った。「神が、少なくとも私にとっては、まさに最も確かで直接的な経験の一つであることがあの頃私に明らかになった」。ユングは学問的な著作では、神についてではなく「人間の魂の中の神のイメージGottesbild」について語る。(6-7)

ヤッフェの言うように、ユングは「神」と「神のイメージ」を厳格に区別し、自らが関わるのはあくまでも後者であると強調するのが常であった<sup>7</sup>。ところが、自伝ではユングは前者について語っているとヤッフェは言うのである。これは自伝の特性としてきわめて重要である。河合俊雄氏の次の見解に私も賛同する。「普通ユングは形而上学的、あるいは神学的な議論をしているように取られないために、自分は「神のイメージ」だけを扱い、心理学的な考察をしているのだと強調し、また自分の主張に制限を加えている。しかし『自伝』ではユングは「神のイメージ」という表現にこだわっていない。編者のヤッフェも述べているように、ユングが直接に神について言及しているのは『自伝』においてだけであり、それだけにユングが本来述べたかったことを垣間見させてくれるのである」<sup>8</sup>。

さらに、ヤッフェの言う「彼の個人的な神の経験」は、主として夢や幻の形をとっているのであるが、夢や幻がユングによって「啓示」あるいは「照明」と受けとめられている (e. g. 19, 45) ことも重く見なければならない。アンソニー・ストーはいみじくも次のように言う。「彼〔ユング〕は多くの点で謙虚な人柄であったが、自らの幻、夢、空想は神からの直接の啓示であると信じていたようなのである」<sup>9</sup>。ストーはまた次のような見解を表明しているが、これも当たっているであろう。「靈感を受けた預言者と見なされるか精神的に病んでいると見なされるかの境界線はしばしば紙一重である。ユングが謙遜しながらも自らを前者と見て、自らの洞察の創始者というよりは靈感の器と見なしていたことは疑いない」<sup>10</sup>。自伝に見られる神についての語り全般をストーの言う「預言者」ユングの語りで見なしたい。また、特に神についての考えは、H・L・フィルプの言葉を借りて「俗人神学者」<sup>11</sup> ユングの考えとも見なしたい。神についての思索は自伝の随所に見出されるが、神についての言明は「晩年の思想」と題される章(330-356)でなされている。ヤッフェも同章には「彼の最も深い、もしかしたら最も遠大な思想が言明されているのが見出される」(2)と言っている。したがって、殊に晩年のユングの神についての考えは「俗人神学者」の弁というにふさわしいであろう。

尤も、自伝で語られる神についても、あくまでもユングが体験した心的現実としての神ととらえなければならぬと考える研究者もいる。渡辺学氏は次のように言う。「われわれはとりあえず、ここで語られている神を存在論的な意味で実在する神と解することはできない。なぜなら、ユングにおいては存在論的なレベルの問題が無効化され、体験的現実のレベルへと置き換えられているからである。つまり、神は、あくまでユングが体験した心的現実、つまり、ユングにとっての体験的現実であり、ユングの体験世界に現われた神である」<sup>12</sup>。たしかに、自伝以外のユングの著作にはこのことが当てはまるであろう。そこでは、実のところはどうであれ建前上は神のイメージが扱われているからである。しかし、先述のように、自伝でだけは神、すなわち形而上学や神学や信仰において想定されている超越的な神について語られていると考えなければならないのである。たしかに、その神はユングの夢や幻にあらわれた神、あるいはユングの考える神であり、ユングの心を介しているという意味ではユングに体験された神であると言えようが、先述のように、夢や幻はユングにおいては「啓示」、「照明」ととらえられており、神についての考えは神学的思弁というべきものであって、超越的な神の存在が前提となっているのである。自伝でユングは15歳の頃のことを語る中で、「私にはしばしば、すべての決定的なことにおいて、人間たちとともにいるのではなく、ひとり神とともにいるという感じがあった」(53)と述べているが、これなどは実在する神について語っているとしか解しようがないであろう。

以上のことを踏まえ、自伝ではユングは、他の著作ではつけている、自分は神ではなく神のイメージについて語っているのだという留保を取り払って、神について直接語っているということを重んじなければならない。本稿も、自伝に神についてのユングの体験や思想を見出し得ることを期して、BBCの『フェイス・トゥ・フェイス』でのインタビューでユングが「知っている」と明かした神がどのような神であるのかを探るためのよりどころとして自伝を用いるのである<sup>13</sup>。

さて、「はじめに」で、1960年1月21日付の『リスナー』誌でユングがキリスト教徒を自認しながらキリスト教にとらわれない神理解を表明したことに言及したが、ヤッフェも「ユングはキリスト教の信仰を持っていることを明確に公言していた」<sup>14</sup>(6)としつつ、次のように述べる。

ユングの宗教的なものについての概念は、多くの点で伝統的なキリスト教とは区別される。とりわけ悪の問題への彼の答えと善あるいは「愛」のみではない神の表象の点で。教条的なキリスト教の観点からはユングはアウトサイダーであった。[...] 一度ならず彼は憤然と述べた。「中世であれば、私は火あぶりにされていたであろう！」(6)

ユングはヤッフェの言う「アウトサイダー」の自覚があったからこそ、自伝の公刊にはことのほか慎重であった<sup>15</sup>。ヤッフェは次のように伝えている。

ユングはこの『自伝』を作り上げることにはたいへん肯定的、積極的に関与したが、それを公刊するという問題には、理解できることであるが、長い間たいへん批判的、否定的な態度をとった。彼はとりわけ、彼が自らの宗教的な体験や考えを明かした際のあけびろげさゆえに公衆の反応を恐れた。彼が著書『ヨブへの答え』について経験した敵意は未だあまりに近く、世間の無理解や誤解はあまりに苦痛であった。「私はこの資料を生涯守ってきたのであり、世間にさらそうなどと思ったことはない。[...] ヨブの本があればほど多くの無理解にあったからには、私の回想録はさらにひどい目にあうであろう。[...]」(7-8)

「はじめに」の冒頭でも述べたように、『ヨブへの答え』はとりわけ大きな波紋を呼んだ著作である。しかも、同書では実質はどうあれ神のイメージについて論じることを宣言している(註7参照)にもかかわらず、である。神について直接語っている自伝は推して知るべし、ということであろう。

とにかく、これまで述べてきたような次第で、自伝はユングが知っていた神とはどのような神であったのかを探るための第一級の資料と見なし得るのである。

## 1.2 自伝の読み方

1.1で示したように、ヤッフェが「ユングは彼の回想録で初めて且つ唯一、神について、また彼の個人的な神の経験について語る」と明言していることや、「彼はとりわけ、彼が自らの宗教的な体験や考えを明かした際のあけっぴろげさゆえに公衆の反応を恐れた」と述べていることから、自伝におけるユングの神についての体験や考えは偽りなしに率直に赤裸々に語られたものであると見られる。また、これも1.1で触れたが、ユング自身、神の夢や幻を「啓示」、「照明」と断じてもいる。これらのことから、神についてのユングの言葉は文字どおり受けとらなければならないと考えられるのである。本稿では自伝にそのような姿勢で臨む。

## 2 ユングの知っていた神を自伝に探る

本章では、自伝からユングの神との関わりや神についての考えを拾い出し、それを精査し、その内容を明らかにする。

### 2.1 3歳の時に見た神の夢

ユングは3歳<sup>16</sup>の時に神の夢を見た<sup>17</sup>。夢の内容が示されているくだりを以下に引く。

牧師館はラウフェン城のそばにぼつんと立っていて、寺男の屋敷の裏には大きな草地があった。夢で私はこの草地に立っていた。突然私は地面に、暗い、長方形の、内壁の張られた穴を発見した。それは私がそれまでに見たことのないものであった。私は好奇心に駆られ、近づいて、中をのぞいた。中には石の階段が見え、深みに通じていた。私はためらいながら、おそろおそろ、下りていった。下りたところには半円アーチの付いた出入口があり、緑のカーテンが下ろされていた。そのカーテンは大きく重く、織物というかプロケードで出来ているようで、とても豪華な印象を与えた。その後ろにはたして何が隠れているのだろうと好奇心に駆られ、私はカーテンを脇へ押しやった。すると、薄明かりの中に奥行き約10メートルの長方形の部屋があった。アーチ形の天井は石で出来ていて、床も板石で覆われていた。中央には赤いじゅうたんが入口から低い壇のところまでのびていた。壇の上にはすばらしく豪華な黄金の玉座があった。定かではないが、もしかしたらその上に赤い座布団があったかもしれない。その座は華麗で、おとぎ話に出てくるような本物の王座であった！ さて、その上に何か立っていた。それは巨大な物体で、天井まで届きそうであった。それは木の幹だと私ははじめ思った。直径は50～60センチメートルほどで、高さは4～5メートルほどであった。その物体は、しかし、奇妙なつくりをしていた。それは皮と生きた肉で出来ていて、上には顔も髪もない先丸円錐形の頭のようなものがあったが、頭のてっぺんには目が一つだけあって、動かず上方を見ていた。

部屋の中は比較的明るかったが、窓も光源もなかった。しかし頭の上を一定の明るさが覆っていた。その物は動かなかったが、それでも私には、それが今にも蠕虫のように玉座から這い降りて私の方へ這ってくるかのように感じられた。私は恐怖のあまり麻痺したようになった。この耐えがたい瞬間、私は突然、外の上からのような母の声を聞いた。「ほら、彼をよく見てごらんさい。それは人食いです！」とその声は叫んでいた。(18-19)

ユングが玉座の上に立っていた物体について「ずっと後になってようやくその奇妙な物体がファルスであるということ、そして何十年も経ってようやくそれが儀式のファルスであることを私は発見した」(19)と述べていることから、長じてユングがその物体を「ファルス」と認識するようになったことがわかる。また、「とにかく、この夢のファルスは、地下の、口にしてはならない神であるように思えた。そういうものとして、彼は私の若い時分ずっと私に留まった」(19)とあることから、若い頃、ユングがそれを「神」と認定したことがうかがえる。さらに、その頃、ユングはその物体について「私が求めたわけではない恐ろしい啓示」(19)とも受けとめていた。この夢の情景について「夢で私は穴の中に下りていき、そこで黄金の玉座の上に異形の存在、人間ではない、地下世界の存在を見つけた。それはじっと上方を見ており、人肉を常食としていた」(20-21)と説明されるが、この説明は自伝を物した時点でのものであろう。夢の内容と夢についてのユングの解釈を総合すれば、神がユングの夢に地下のファルスの姿をした人食いとしてあらわれて、自らの恐ろしさをユングに直々に告げたということになる。この神が、ユングが初めて知った神なのである。

ユングはこの神を主イエスと対比させている。ユングは若い頃、この神が「主イエス・キリストについていささか強調しすぎて語られる<sup>18</sup>時は決まって心に浮かんできた」(19)という。またその頃のユングはこの神を「彼〔主イエス〕の地下の対手」(19)ととらえていた。ユングがこの神をキリスト教と関わりのある神と認識していたことがうかがえる。

また、次の記述からもユングがこの神をキリスト教と関わりがあるものととらえていたことがわかる。ユングが9歳の時の話である。

意識において、私はキリスト教的な意味で宗教的であった。ただし、常に「しかしそれはそんなに確かではない！」という割引や、「地面の下にいるあのものについてはどうなのか」という問いが伴っていた。そして、私に宗教的な教えがたたき込まれ、「それは美しい、それは善い」と言われると、「はい、しかし極秘の何か異形のものはやはりある。それを人々は知らないのだ」と私は心の中で密かに思った。(28-29)

このように、当時のユングは敬虔なキリスト教徒でありつつも、夢で見た物体に照らして、キリスト教に批判的な思いをいだくようになっていた。この時点でユングには、当の物体が神であるとの認識がなんらかあったにちがいない。たたき込まれた教えがどのようなものであったのかは詳らかとしないが、神の「美」や「善」を説くものだったのであろう。ユングは早くも9歳の時点で、夢にあらわれた神と思しき物体がキリスト教の教えからこぼれ落ちた自らの性格をユングに夢で知らせてきたという感触をいただいていたと考えられるのである。

## 2.2 9歳から10歳にかけての小人の神をまつる儀式と10歳の頃からの神への祈り

ユングは9歳の時から約1年間小人の神をまつる儀式を密かに行き<sup>19</sup>、10歳の頃から神にひとり祈り始めた。両者には関連があるので、個々に見ていくとともに、その関連性にも留意する。

まず、小人の神をまつる儀式から見てみよう。それが語られている箇所を以下に示す。

私は当時、小学生の持つような、小さな留め金の付いた、黄色くニス塗られた筆箱を使っていた。その中には定規も入っていた。ある時私はその定規の端に「フロックコートとシルクハットとびかびかに磨かれた靴」を着用した、小さな6センチメートル大の小人を彫った。私はそれをインクで黒く塗り、鋸で定規から切り離して筆箱の中に横たえた。そこに私は彼のために小さなベッドをしつらえてあった。私は彼に一片の羊毛で小さな外套さえ作った。彼のために私はすべすべした細長くて黒つ

ばいライン川の小石を置いた。その小石は、私が上部と下部が分かれるように絵の具で色を塗って、長いことズボンのポケットに入れて持ち歩いていたものであった。それは彼の石だったのである。これら全体は私にとって大きな秘密であったが、それについて私はなにも理解していなかった。私は小人の入ったこの箱を、上るのを禁じられていた（床板が虫に食われ、朽ちていて危険なので禁じられていた）屋根裏へ密かに持っていき、屋根組の支梁の上に隠した。[…]

あらゆる困難な状況に際して、[…] 私は私の丁寧に寝かされくるまれた小人と彼の美しく色を塗られたすべすべした石のことを考えた。時々——しばしば数週間の中断を経て——私は密かに、また誰にも見られていないことを私が確信できた時だけ、屋根裏に上り、梁によじ登ってあの箱を開け、小人と石を見つめた。また、そのたびに私は、前もって何かを書いておいた小さな巻紙を入れていった。その巻紙は私が授業時間中に、私の考え出した秘密の文字で書いたものであった。びっしり書き込まれた細長い紙は巻かれて小人に保管が委ねられた。私は新しい巻紙を加えていく行為が常に祭儀的行為の性格を帯びていたことを覚えている。残念ながら、私は小人に何を伝えようとしたのか思い出すことができない。私は私の「手紙」が彼にとって一種の図書館を意味していたということを知っているだけである。不確かな推測ではあるが、それは私が特に気に入っていた格言であったように思う。(27-28)

ユングは「私は私が表現しようとしているものが一体何なのか知らなかった」(28)という。しかし、注目すべきは、「黒」という小人の色と「フロックコートとシルクハットとびかびかに磨かれた靴」という小人の服装である。この色と服装にユングはなじみがあった。それは父や伯父たちやその同僚の牧師の姿(16 etc.) そのものなのである。そのことは、たとえユングには意識されていなかったのだとしても、小人とキリスト教との関わりをユングが示そうとしたことを物語っている。また、ユングが小人に寝床や外套をととのえたり大事にしていた小石を与えたりしたことからは、小人はユングにとって大切な存在であったことが知られるし、ユングが困難に遭った時小人のことを考えてしのいでいたことから、小人はユングを癒やしてくれる存在であったことがわかる。小人を安置した筆箱に手紙を入れていく行為がユングにとって「祭儀的行為」の性格を帯びていたということからは、ユングが小人を神聖な存在と感じていたことがうかがえる。

とはいえ、先に示したように、ユングは「私は私が表現しようとしているものが一体何なのか知らなかった」というのであり、未だ小人の正体は認識していなかったと見られる。小人の正体は、ユングが10歳の頃から始めた神への祈りから遡及的に確定し得る。神への祈りそのものも注目に値するが、それと小人をまつる儀式との関連性も重要である。

私は神に祈り始めたが、それは私には矛盾がないように思えたので、私をとにもかくにも満足させた。[…] 彼(神)は、私が聞いていたように、人がそれについていかなる正しい表象も作ることでできない独一無比の存在であった。[…] 人は神と、なんら「秘密」ではない「主イエス」ほどには親しく関わるができないはずなのである。私の屋根裏での秘密とのなんらかの類似性がうっすらとわかってきた…。(33-34)

ユングがひとり独一無比の神に祈って満足していた様子がうかがえる。ここでもユングはファルスの子の時と同様、神を主イエスと対比させ、キリスト教との関わりを匂わせている。さて、神への祈りと小人をまつる儀式に「なんらかの類似性」が指摘されている。このことから、小人の正体が実は神であったことが遡って明らかになるのである。小人が牧師の風采であったこともあわせて、ユングがまつた小人とは、キリスト教と関わりのある神であったということになる。

### 2.3 12歳になる夏に見た神の幻

ユングは1887年（12歳になる年）の夏に神の幻を見た<sup>20</sup>。幻を見るまでの経緯を要約し、幻の内容と幻によって理解したことが語られているくぐりを示す。

ある晴れた夏の日のパール大聖堂広場でのことである。真っ青な空、さんさんと照る太陽、輝く新しい彩色の大聖堂の屋根。ユングはその光景の美しさに圧倒され、考えた。「世界は美しい、教会は美しい。そして神はこれらすべてを創造し、その上方の青空のはるか彼方で黄金の玉座に座っている、そして——」。ここまで考えた時、「穴」が思い浮かび、窒息感に見舞われ、麻痺したようになり、これ以上考えると「最大の罪」すなわち「聖霊に逆らう罪」を犯して永遠に地獄に落とされると直観し、思考を制止した。しかしいくら考えまいとしても大聖堂と神のことを考えそうになる。必死に制止し続けたが、3日目の夜、よく眠れず中途覚醒した時、またしても大聖堂と神のことを考えそうになっていることに気づく。抵抗力が弱まっていくのを感じ、ベッドで体を起こし、「私は考えなければならない」とさとする。そして、自分が罪を犯しそうな状況に置かれていることの原因について考えを巡らせていくうちに、そのことの責任は誰にあるのかという問いへと思考が収斂する。ユング自身は罪を犯さないよう自制してきたのだし、罪を犯すとしても、そのような自分を自分で創造したわけではなく、そのように生まれついたので、自分のせいではあり得ない。それなら、両親や祖父母の責任か。否、善良な両親や、肖像でしか知らないが優しく威厳のある祖父母のせいとも考えられない。先祖の系譜を遡れば最初の両親アダムとエヴァに行き着く。彼らは、完全なものだけを創造する神によって直接、意図的に創造されたにもかかわらず罪を犯した。これはどういうことか。「神はその全知において、最初の両親が罪を犯さなければならないようにすべてをととのえた。だから、彼らが罪を犯さなければならなかったのは神の意図であつた」ということである。そうだとすれば、自分が罪を犯すとしても、それも神の意図であろう。現に、神は「その全能の力で、私からこの強制を取り去ることも容易にできるはずである」のにそうはしてくれないのである。ユングは次のような考えに到達した。「私の信仰と私の洞察が地獄と永遠の罰を恐れているにもかかわらず私が神の意志に従うことができるかどうかを、神は見たがっているということなのだろうか。実はそういうことなのかもしれない！」ユングは慎重を期して再度熟考したが同じ結論に達したので、勇気を総結集させて考えが浮かぶに任せた（以上、42-45の要約）。

浮かんできた考えは視覚的なもので、幻の形をとっていた。

私の目の前に美しい大聖堂が立っていて、その上方に青空がある。神は世界の上方の高みで黄金の玉座に座っている。玉座の下から極大の糞が教会の新しい彩色の屋根に落ちて、それを砕き、教会の壁を裂く。(45)

これがユングの見た神の幻の内容である。この幻を見た直後にユングが感じ考えたことは以下のとおりである。

私は極大の安堵と筆紙に尽くしがたい救済を感じた。予期していた永遠の罰の代わりに恩恵が、そしてそれとともに、私がかつて知らなかったような言語に絶した至福が私を訪れた。私が神の容赦のない厳しさに屈した後神の知恵と慈しみが私に開示されたことの幸福と感謝で私は泣いた。それは私に照明を体験したという感じを与えた。[...] 彼〔父〕は聖書に書かれているような、また父祖が彼に教えたような神を信じていた。しかし彼は、全能で自由で、聖書や教会の上に立ち、人間を自由へと呼び出し、自らの要求を無条件に満たすために人間に自分自身の見解や確信をすすめるよう強いることができる、生きた直接的な神を知らなかった。(45-46)

神の幻はユングに「照明」と受けとめられている。また、神の慈しみが強調され、神の知恵、全能、自由、生も指摘されている。ところが、恐らく幻を見てしばらく経ってから内省し、ユングは神について別の見方をするようにもなった。

私が考えなければならなかった考えは、私には恐るべきものであった。そしてその考えとともに、神は何か恐ろしいものであり得るという予感が芽生えた。私が体験したのは恐ろしい秘密だったのである。(46)

その後さらにある程度の時を経てからのことと考えられるが、この体験が次のように振り返られている。

私の母の一族には6人の牧師がいた。また、私の父だけでなく彼の兄弟2人も牧師であった。だから私は、多くの宗教的会話や神学的議論や説教を聞いた。それを聞くと私はいつも次のように感じた。「はい、はい、それはまったく美しい。しかしあの秘密はどうか。あれは実に恩恵の秘密でもある。それについてあなたたちはなにも知らない。神は私とその恩恵を体験するために不正をさえ行い忌まわしいことをさえ考えることを欲する、ということあなたたちは知らない。」(47-48)

ここから、当時のユングが、牧師を務める父や親戚から聞かされた神についての教説を認めながらも、教説に尽くされていないところを神から直々に教えられたと考えていたことがわかる。教説に尽くされていないところは、神の破壊的な恐ろしさや、恩恵を与えるために人間を不正や忌まわしい考えへと誘う神の意向である。

1890年(15歳になる年)に教会であずかった聖餐<sup>21</sup>についての話の中に、当時のユングが神の幻の体験を踏まえて神について考えたことが開陳されている箇所があるので、そこも見よう。

神は慈しみ深くて恐ろしい、その両者であり、それゆえ人が身を守ろうと努めるのもっとも大きな危険である。(61)

「慈しみ深くて恐ろしい」、これこそユングが神の幻の体験から知った神なのである。

以上、2.1、2.2、2.3で見てきたユングの子ども時代の神との関わりはどれもユングの「秘密」であった。それらは子ども時代から何十年も「厳しいタブー」(47)であり、ユングは神の夢を65歳になるまで誰にも話さなかったといい(47)、神の夢と神の幻については「私の人生の決定的な出来事であった」(53)という。このように、ユングの子ども時代の神との関わりは生涯影響力を持つほど強烈だったのであり(註17、19、20も参照)、ユングの「神の知」も主としてそこに由来すると考えられる。とはいえ、自伝からは、神とのユングの関わりは生涯にわたるものであったことが確かめられる。以下、2.4ではユングの青年期以降の神との交わりを、2.5ではユングの晩年の神についての考えをとり上げ、ユングが知っていた神とはどのような神であったのか、さらに探っていきたい。

## 2.4 青年期以降の神との交わり

まず、15歳の頃のことが語られているくだりに、ユングが日頃から神と交わっていたことを示唆する記述があるので、そこを見よう。

私にはしばしば、すべての決定的なことにおいて、人間たちとともにいるのではなく、ひとり神とともにいるという感じがあった。私がおはひひとりではない「そこ」にいる時いつも私は時間の外にいた。私は何世紀も存在し、その時答えを与えた者は、既に常にいた、また常にいる者であった。この「他者」との会話は私の最も深い体験であった。つまり、一方では血みどろの闘いであり、他方では最高の陶酔であった。(53)



ユングが人知れず日常的に神と会話していたこと、またその神は一方でユングに闘いを挑み、他方でユングに陶酔をもたらす存在であったことがわかる。また、ユングはこの頃教会であずかった聖餐で神が不在であったことに失望し（註21参照）、それ以降可能な限り教会に行かないようにしていた（61, 80）のであるが、15、16歳の時、つまり教会に見切りをつけてほどなくして、教会の代わりに「私の私的な礼拝堂を持ちたいものだ」（84）との思いをいただくようになる。この思いは、1923年に建てたボリンゲンの別宅に1931年に2度目の増築をした際、ユングだけが入れる「靈的集中の場」を設けた（228）ことをもって実現されたと見られる。これらのことから、ユングが15歳の頃からずっと神との私的な交わりを続けていたことがうかがえるのである。

ユングは高齢になって、神が登場する夢を見ているので、その記述を見てみよう。ユングは『ヨブへの答え』を執筆する前にその夢を見た。夢の中の一画面でユングは父とともに、全体が巨大なマンダラをなした建物の中におり、そこで父によって神の前に導かれる。

夢の中で、突然私は中央から険しい階段が壁の高所にのびているのを見た。[...] その高所には小さな扉があり、私の父は「これから私はあなたを最高の存在へと導こう！」と言った。[...] そして彼は跪いて額を床につけた。私も彼に倣って恭しく跪いた。何らかの理由で私は額をすっかり床につけることができなかった。額と床の間は1ミリメートルほどあいていた。（222）

ユングにとって、父に倣わず確保した、額と床の1ミリメートルほどの隙間は重大な意味を持つ。それは「人間は神の思召しを前にしてさえ断案を留保する」（223）ということを示しているからである。つまり、「この夢は人類の中に古くから存在している考えと予感、つまり僅かではあるが決定的なもの〔意識〕に関して創造主を凌ぐ被造物という観念を明らかにしてみせる」（224）というのである。

## 2.5 晩年の神についての考え

神についてユングが言明している箇所は2箇所ある。いずれも「晩年の思想」の章で述べられており、思弁的色彩が濃いのが、ユングが自らの体験から知っていた神について概念的に表現したものともとり得る。

創造主が自分自身を意識しているのであれば、彼は意識的な被造物を必要としないであろう。また、無数の種や生物の産出に何百万年も浪費する、最高に遠回りな創造の道が、目的を持った意図に発するということもありそうにない。（341）

神の自己意識の欠如を指摘し、神の創造にも目的を持った意図を認めない、神の意識性を疑問視する言明と見えよう。

対立の複合complexio oppositorumとしての神にあっては、語の全き意味において「すべてのことが可能」である。つまり、真と偽、善と悪〔が可能である〕。（343）

こちらは神の両面性についての包括的言明と見なし得る。

## 3 ユングの知っていた神とは

以上自伝をたどって、ユングの生涯にわたる神との関わりや神についての考えを見てきた。ここでは、これまで述べてきたことに基づいて、ユングの知っていた神について考察する。適宜、根拠となる本稿の章節も示す。

ユングは、3歳の時に見た神の夢や12歳になる夏に見た神の幻から、神が「生きた」存在であることを

知り（2.1、2.3）、15歳の頃には「既に常にいた、また常にいる者」としての永遠の神としばしば会話していた（2.4）。

ユングはまた、神の恐ろしさを知った。ユングは夢にあらわれたファルスの神について「恐ろしい啓示」と言っていたし、神の幻から「神は何か恐ろしいものであり得るという予感が芽生えた」と述べていた。その恐ろしさは、まず、夢の中の神が異形のものであったことや、実際にユングを食べようとはしなかったものの、母の声によって「人食い」と同定されたこと、また、幻にあらわれた神が上空からバーゼル大聖堂を破壊したことによると考えられる。さらに、神が人間に恩恵を体験させるために人間に「不正」を行わせたり「忌まわしいこと」を考えさせたりするということにも由来するであろう。ユングは、神は人間にとって「大きな危険」であるとさえ言った（2.1、2.3）。

とはいえ、ユングは神の恐ろしさだけを知ったわけではなかった。神の慈しみもユングは確かに知っていた。ユングが9歳の時に彫った小人はいわば神の像であったが、ユングを癒やしてくれた（2.2）。ユングは10歳の頃から神に祈り始めたのであるが、神への祈りはユングを満足させ得るものであった（2.2）。ユングは12歳になる夏に神の幻を見た後神の「慈しみ」が開示されたことを実感した。最大の罪を恐れながらも果敢に幻が浮かぶに任せたユングに神は「極大の安堵」、「筆紙に尽くしがたい救済」、「恩恵」、「言語に絶した至福」を与えたのであった（2.3）。

そのような恐ろしくもあり慈しみ深くもある神をユングは体験的に知ったのであるが、15歳の頃にしばしば行っていたという神との会話は「一方では血みどろの闘いであり、他方では最高の陶醉であった」（2.4）。こうしてユングは「神は慈しみ深くて恐ろしい、その両者」であることを確認し（2.3）、晩年になって「対立の複合としての神にあっては、語の全き意味において「すべてのことが可能」である。つまり、真と偽、善と悪〔が可能である〕」と言明するに至るのである（2.5）。

ユングは神の幻の体験から神の「全能」と「自由」の確証を得た。尤も、神の全能については、ユングは幻を見る前の思弁でも言及しているので、幻の体験前からそう認識していたのであろう（2.3）。

ユングは神の幻を見た後神の「知恵」が開示されたと理解した。また、幻を見る前の思弁では神の「全知」を前提にしていた（2.3）。しかし、神の全知は人間が意識に関して神を凌ぐことも織り込み済みであったとユングは考えているようである。高齢になって見た小さな扉の向こうの神に跪く夢で、ユングは額をすっかり床につけることができず、額と床の間は1ミリメートルほどあいていたというのであるが、ユングによると、これは「人間は神の思召しを前にしてさえ断案を留保する」ことを示しており、この夢は「僅かではあるが決定的なもの〔意識〕に関して創造主を凌ぐ被造物という観念を明らかにしてみせる」という（2.4）。晩年には「創造主が自分自身を意識しているのであれば、彼は意識的な被造物を必要としないであろう。また、無数の種や生物の産出に何百万年も浪費する、最高に遠回りな創造の道が、目的を持った意図に発するということもありそうにない」として、ユングは神の意識性を疑問視するに至る（2.5）。

ところで、ユングの知っていた神はキリスト教の神なのであろうか。ファルスの神や祈りを捧げた神が「主イエス」と対比させられていること（2.1、2.2）、小人の神が「牧師」の風采であること（2.2）、神の幻の光景が「バーゼル大聖堂」であること（2.3）、ユングが神について思索する際、神を「創造主」と前提していること（2.3、2.5）、ユングが夢や幻で見た神のありように基づいて神についてのキリスト教の教説の一面性を批判していること（2.1、2.3）などから、キリスト教の神であることが示唆される。また、ユングが自らの体験や思索から神に帰属させた生、永遠、慈しみ、真、善、全能、自由、知恵、全知、ユングが教えられたり聞いたたりしたところを受け入れて神に認めた「美」、「善」（2.1）、「独

一無比」(2.2)は、神についてのキリスト教の教説<sup>22</sup>と一致する。しかし、ユングは暴力的、破壊的な恐ろしさも神の一面であるとし、神を対立の複合と規定して偽や悪も神に帰属させ、神は恩恵を体験させるために人間に不正を行わせたり忌まわしいことを考えさせたりするともとらえ、意識に関して神が人間に劣るとの考えを示し、神の意識性自体も疑問視した。それらの神理解はキリスト教に到底受け入れられるものではない。さらに、ユングが幻で見た神について「聖書や教会の上に立」つと言っていること(2.3)から、キリスト教を超える神であることも確かである。

以上のことから、ユングの知っていた神とはキリスト教の異端の神であるとするのが妥当である<sup>23</sup>。「はじめに」での見立てどおりであった。

## おわりに

BBCの『フェイス・トゥ・フェイス』でのインタビューでユングが「知っている」と明かした神について『リスナー』誌でユングによって説明がなされたものの、その説明は抑制のきいた抽象的なものにとどまっていたため、ユングの知っていた神とは具体的にどのような神であったのかという問題意識から自伝に臨み、自伝を精査した。その結果、ユングの知っていた神とは、「はじめに」での見立てどおり、キリスト教の異端の神と言うべきものであることが確かめられた。

「はじめに」および1.1で、ユングが高齢になって著した『ヨブへの答え』において主として聖書に基づいて神の悪の面や神の無意識性を指摘して大きな波紋を呼んだことに言及したが、その背景には、遠い過去のことはあるがユングの心の中には常に生き生きと現在していた子ども時代の神との関わりおよび生涯にわたる神との交わりや神についての思索があったのである。ユングにしてみれば、「神の知」の源は神の啓示ないし照明なのであり、自らのこしらえものではないということになる。『ヨブへの答え』についても、自らの「神の知」が陰に陽に影響して、聖書から神の悪の面や無意識性を見てとらざるを得なかったという面があると考えられるのである。ユングの神理解が正統なキリスト教の信者はもとより、恐らく一般の人の神理解からも隔たっているとしても、瀆神的と難じるべきではなく、自らの知っていた神に忠実であったことの証として評価すべきなのである。

## 註

引用文中の〔 〕は引用者による補足、説明、解釈を、〔…〕は引用者による省略を表す。

洋文献からの引用文はすべて私訳であるが、既存の邦訳があるものについては参考にさせていただき、下記拙著で引用した箇所については拙訳も参照した。

- 1 拙著『ユングにおける悪と宗教的倫理』教文館、2009年、第五章、特に五・九・一・一、五・九・一・一・一、五・九・一・一・二参照。
- 2 William McGuire & R. F. C. Hull (eds.), *C. G. Jung Speaking: Interviews and Encounters*, Princeton University Press, 1977, p. 428.
- 3 Frieda Fordham, Dr. Jung on Life and Death, *The Listener*, vol. LXII, no. 1596, October 29 1959, pp. 722-725.
- 4 Carl Gustav Jung, Dr. Jung's Television Broadcast, in: Letters to the Editor, *The Listener*, vol. LXIII, no. 1608, January 21 1960, p. 133.

- 5 同書は書名で呼ばれるよりも自伝と呼ばれる方が一般的なもので、本稿もそれに倣う。自伝からの引用はすべて以下による。C. G. Jung, *Erinnerungen, Träume, Gedanken von C. G. Jung*, aufgezeichnet und herausgegeben von Aniela Jaffé, Walter-Verlag, Sonderausgabe 10. Aufl. 1997. 同書の引用ないし参照は ( ) にページ数を示す。
- 6 序では自伝の成立の経緯についても詳しく述べられている。大略、1957年春からユングとヤッフェはやりとりを重ね、ユングの語りや筆になるものをヤッフェが編集して自伝は成ったという。
- 7 典型的なのが『ヨブへの答え』の序文で、ユングは執拗なまでに、同書で論じるのは神ではなく神のイメージである旨述べている。ところが、本文に入るや、序文での宣言など忘れたかのように、ユングは神について語り出す。序文での宣言は、キリスト教界や世間からの非難を恐れて予防線を張ろうとしたのではないかと勘ぐりたくもなるのである。同書の序文と本文に見られるこのギャップについては、前掲拙著、第五章の註7で詳細に論じているので、参照されたい。
- 8 河合俊雄『ユング——魂の現実性』(現代思想の冒険者たち第03巻) 講談社、1998年、63頁。
- 9 Anthony Storr, *Jung*, Fontana Press, 1973, p. 101.
- 10 *ibid.*, p. 22.
- 11 この言葉は、『ヨブへの答え』におけるユングの語り口をフィルプが形容したものである (H. L. Philp, *Jung and the Problem of Evil*, Rockliff, 1958, p. 137)。前註7でも触れたように、『ヨブへの答え』ではユングは神と神のイメージを区別して、自らが関わるのは後者であると限定しながらその限定を超えてしまったのであり、フィルプはそれを見抜いたのである。自伝ではその区別も廃され、ユングは直接神について語っているわけであるからなおのことユングの語りを「俗人神学者」の語りにとらえることは正当となるのである。
- 12 渡辺学『ユング心理学と宗教』第三文明社、1994年、43頁。
- 13 BBCでのユングの神をめぐる発言と自伝に記されているユングの神体験を関連づけている先行研究には、渡辺氏のものがある。渡辺氏は、前者を「ユングは体験知を信仰の上に置く」ことを示すものとして引き、後者については「そのような〔厳然とした現実としての〕「神」を体験するという意味で、確かにユングは体験に恵まれていた」として、ユングが12歳になる夏に見た神の幻を例示する (渡辺学『ユングにおける心と体験世界』(南山大学学術叢書) 春秋社、1991年、32-34頁)。本稿でも、BBCでのユングの神を「知っている」という発言を自伝に記されているユングの神体験と関連づけるのであるが、本稿の関連づけの特徴は、BBCでのユングのその発言の具体的な内容を自伝に探るといって明確な問題意識があり、ユングの生涯にわたる神との関わりや神についての考えを射程におさめるところにある。
- 14 ユングの信仰については、ユングがバルマー・A・ヒルティ (Palmer A. Hilty) に宛てた1955年10月25日付の書簡から詳しい情報が得られる。「私はスイス改革派に属しております。私の父は牧師でした」 (C. G. Jung, *C. G. Jung Letters*, selected and edited by Gerhard Adler in collaboration with Aniela Jaffé, vol. 2, Princeton University Press, 1975, p. 274)。
- 15 自伝は、ユングの意向で、彼の死後に出版され、全集にも収録されていない (4, 5)。
- 16 この夢を見た年齢は、夢の内容が示されているくだりの直前では「3、4歳」(18) とされているが、他の箇所では「3歳」(19, 61) と特定されているので、後者を採る。
- 17 この夢は「私が思い出すことのできる最初の、そしていわば生涯にわたって私の心にかかることになった夢」(18) とされる。
- 18 ユングは身近な牧師たち (父の同僚と8人の伯父) が「愛の主イエス」について語るのを聞いた。また、彼らは主イエスの「愛と慈しみ」をいつもユングにたたえてみせた (20)。
- 19 この儀式についてユングは次のようにコメントしている。「彫られた小人のエピソードは私の子ども時代の頂点と締め括りを成した。それは1年ほど続いた。その後私は34歳になるまでこの出来事を完全に失念していた」。34歳の時、『リビドーの変容と象徴』を執筆するための予備研究に取り組んでいた際に、ユングはこの出来事を鮮明に思い出したという (29)。
- 20 ユングはある時、女弟子バーバラ・ハナーに次のように語ったという。「神とバーゼル大聖堂の体験が私の

- 全生涯の指針となった」(Barbara Hannah, *Jung: His Life and Work*, Chiron Publications, 1997, p. 138)。
- 21 ユングはこの聖餐について、神の幻の体験と対照させつつ、「恩恵と照明の体験を望んでいたのに、何も起こらなかった。神は不在であった」(62) と失望をあらわにしている。
  - 22 ユングも属していた改革派の神の教説については、牧田吉和『改革派教義学 2 神論』一麦出版社、2014年、第V章が参考になる。
  - 23 ところで、ユングは10歳の頃、聞いていたところを受け入れて神を「人がそれについていかなる正しい表象も作ることのできない」存在と認めた(2.2)。それなのに、ユングは神を様々に規定し、神に内実を与えている。それはどう解したらよいのか。その問いを解く鍵は、預言者としてのユングの自覚と自負にあると見られる(1.1で示したストーリーの評も参照)。たとえば、ユングは神の幻の体験から知った神の「恩恵の秘密」について、牧師を務める父や親戚は「なにも知らない」と断じている(2.3)。人は知らないけれど自分は知っている。牧師も知らないことを自分は知っている。神から開示されて知っている。そのような確信があったからこそ、ユングは神の内実について語り得たと考えられるのである。

